

5 今後に向けて

福島城跡・十三湊遺跡の調査は緒についたばかりであるが、遺跡の持つ意義の大きさは誰もが痛感するところであろう。幸い93年度から市浦村では青森県教育委員会・青森県埋蔵文化財調査センターの指導の下、村越潔氏を委員長とした市浦村遺跡整備検討委員会を発足させるとともに、学芸員として榊原滋高氏が着任され、計画的な発掘調査が推進されている。そうした委員会や現地での調査の中で指摘されたことも多いが、ここでも重要な点についてふれておきたい。

まず、第1に挙げられるのは、港湾都市としてはぜひ解明したい港施設の実態の調査である。当面は前潟に面した砂洲北西部の湾曲部分付近を港湾施設の中心部として想定しているが、日本海から十三湖への水路の出入り口であったとされる南方の湊明神宮近辺にもさまざまな施設があったことが予測されよう。これらも含めた調査は港の全体像を知る上で不可欠である。

さらに、今回の調査で整然と南半部に短冊形地割に区画された街村状の町屋地区が形成されていたことは確実となったが、具体的にどのような商品が売買されていたのか、生活に季節性は認められたのかなど解明すべき課題は多い。これらについては従来の考古学的手法に加えて理化学的な分析手法や、動物考古学的手法などが有効であり、そうした観点からの調査の実施が一層必要となるだろう。

また、調査手法について付言すれば、非常に砂質の強い基盤層に掘り込まれた遺構を完掘する事は、特に井戸などの場合、深刻な遺跡破壊と一体の関係にある。今後面的な調査が進行する中で、十三湊遺跡の保存と整備を念頭にどういった調査手法が最も適切かを見つけださねばならない。

いずれにせよこうした諸課題を達成するためには、青森県や国の積極的な助力と地域の人々のご理解が必要であろう。そういった意味では福島城・十三湊遺跡の調査成果を伝えるさまざまな企画を継続的に繰り返すことも大切となるに違いない。

(千田)